

京都精華大学50周年記念展

# 石黒宗磨と 八瀬陶窯

—五〇年目の窯出し—

*ISHIGURO Munemaro*  
and his *Yase Toyo Kiln*  
—New Discoveries after 50 Years—



KYOTO SEIKA UNIV.  
50th ANNIVERSARY

*ISHIGURO Munemaro* and his *Yase Toyo* Kiln  
- New Discoveries after 50 Years -



はじめに

## 伝統に根ざし、伝統に縛られず。

独学でありながら、生涯でこれほど多くの作風に挑んだ陶芸家は稀ではないでしょうか。石黒宗磨は、古代から連綿と積み重ねられた陶芸技法の数々を紐解き、再現し、それを自身の表現に取り込もうとした人でした。陶片を師に、物の声に懸命に耳を傾けて陶芸を学びました。晩年の石黒が暮らし、作陶の場とした「八瀬陶窯」には、自身の理想を追い求め、先人たちの技法に学び続けた石黒の痕跡が随所に残っています。

石黒は自身に厳しく、一度の窯焚きで良しとするのは数十のうち数えるほどだったといえます。八瀬陶窯の登り窯周辺からは、石黒が割ったものと思われる陶片が多く見つかっており、そのひとつひとつが石黒の作陶風景を今に伝えていきます。陶片にみられる石黒の試行錯誤は、人間国宝としての偉大なイメージではなく、自身の内面を土にうつそうとした表現者としての苦悩そのものです。

京都精華大学では、八瀬陶窯とそこに残された陶片の検証を起点とした調査・研究活動を2018年からおこなっています。八瀬陶窯は、大正・昭和を生きた文人の美意識を今に伝えます。そして、暮らしと作陶が連続した人生を送った石黒の精神性を読み解くにはこれ以上ない場所です。調査研究の結果、登り窯周辺で土砂に埋もれていた「灯油窯」と「楽窯」が新たに発見され、これまで明らかになっていなかった石黒の作陶設備を知る手がかりとなりました。

2018年6月、本研究の一環として実施した登り窯測量調査において、窯内から石黒作とおもわれる「木葉天目茶碗」が発見されました。本作品は焼成時に容れる「匣鉢」に納められた状態で残っており、焼成時に匣鉢と作品の付着を防ぐための目土も付着したままだったことから、石黒自身が焼成後に取り出すのを忘れたものと考えられます。本作品においては未解明な部分も多く、今後さまざまな機関と協力して全容を解明していきます。

石黒宗磨没後50年を迎えた今は、京都精華大学が開学して50年目の節目でもありました。京都精華大学では、この巡り合わせの年に起きた「50年目の窯出し」を契機に、今後、石黒の作陶技法の変遷や、陶芸への向き合い方、同時代の芸術家交流などについて研究を深めていく予定です。

大きな発見はありましたが、研究活動としては第一歩目です。

新たに知り得た石黒の作陶風景を共有するとともに、いまだ明らかになっていない人物像を皆様と共に考えるきっかけになればうれしく思います。

京都精華大学 八瀬陶窯研究会

「石黒宗磨と八瀬陶窯―50年目の窯出し―」展 実行委員会

## 目次

02	はじめに
05	展覧会「石黒宗麿と八瀬陶窯―五〇年目の窯出し―」
06	八瀬陶窯について
09	石黒宗麿について
10	一、八瀬に窯を開く
18	二、石黒宗麿の陶器作り
24	三、五〇年目の窯出し
30	オープニングトーク「八瀬での石黒宗麿を語る」抄録
35	八瀬陶窯 探訪ツアー
36	石黒宗麿年譜
40	八瀬陶窯と石黒宗麿に関する研究
41	陶片について
42	木葉天目茶碗
44	寄稿
	木村盛伸／鯉江良二／清水保孝／馬場弘吉／森口邦彦
	米原有二／奥村博美／斎藤光／兼松佳宏／中村裕太

京都精華大学50周年記念展

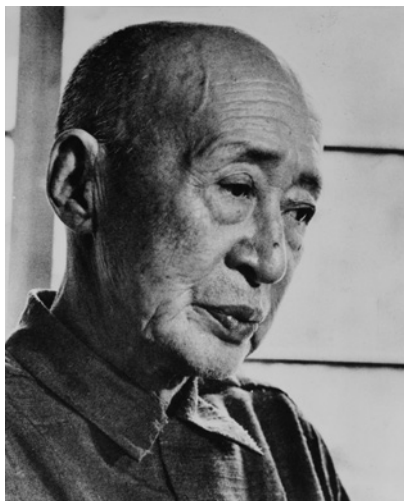
# 石黒宗麿と八瀬陶窯―五〇年目の窯出し―

ISHIGURO Munemaro and his Yase Toyo Kiln ― New Discoveries after 50 Years ―

2018.12/14 FRI ― 2019.1/12 SAT GALLERY FLEUR

## Yase Toyo Kiln

1936（昭和11）年、石黒宗麿が43歳のときに京都市左京区八瀬に築窯。以後、暮らしと作陶の場として晩年までを過ごす。庭にはさまざまな木々や草花が植えられ、自然の景色をこよなく愛した文人・石黒宗麿の横顔を今に伝える。2003年から京都精華大学が管理をしている。



石黒宗麿 1893-1968

1893（明治26）年、富山県射水郡作道村（現射水市）に医者の子として生まれる。25歳の頃に見た曜変天目茶碗の美しさに感銘を受け陶芸家を志す。東京、埼玉、金沢と転居しながら作陶を続け、1927（昭和2）年に京都市東山区に居を移す。天目釉を中心に東洋古陶磁のさまざまな技法研究に取り組んだが特定の師にはつかず、古陶磁を教材として製陶研究に勤しんだ。1936（昭和11）年には京都市左京区八瀬に築窯した住居兼工房である「八瀬陶窯」で作陶を始める。1955（昭和30）年、鉄釉陶器の技法で重要無形文化財保持者（人間国宝）認定を受けた。1956（昭和31）年に八瀬陶窯を財団法人化し、後進の陶芸家養成の拠点づくりをめざした。

*ISHIGURO Munemaro*

石黒宗麿について



## 一、八瀬に窯を開く



### 一、八瀬に窯を開く

1936 (昭和 11) 年 8 月、東山・蛇ヶ谷から洛北・八瀬に移り住んだ。  
二度にわたって取得した土地 (1936 年 515㎡ / 1943 年 1074㎡) の購入費と、  
住居と登り窯、茶室の建設費はすべて支援者が負担した。  
石黒は 1968 (昭和 43) 年にこの世を去るまでここで暮らし作陶した。

八瀬陶窯 記録映像

2018 年 山地憲太 [SHINSEKI] 2分45秒

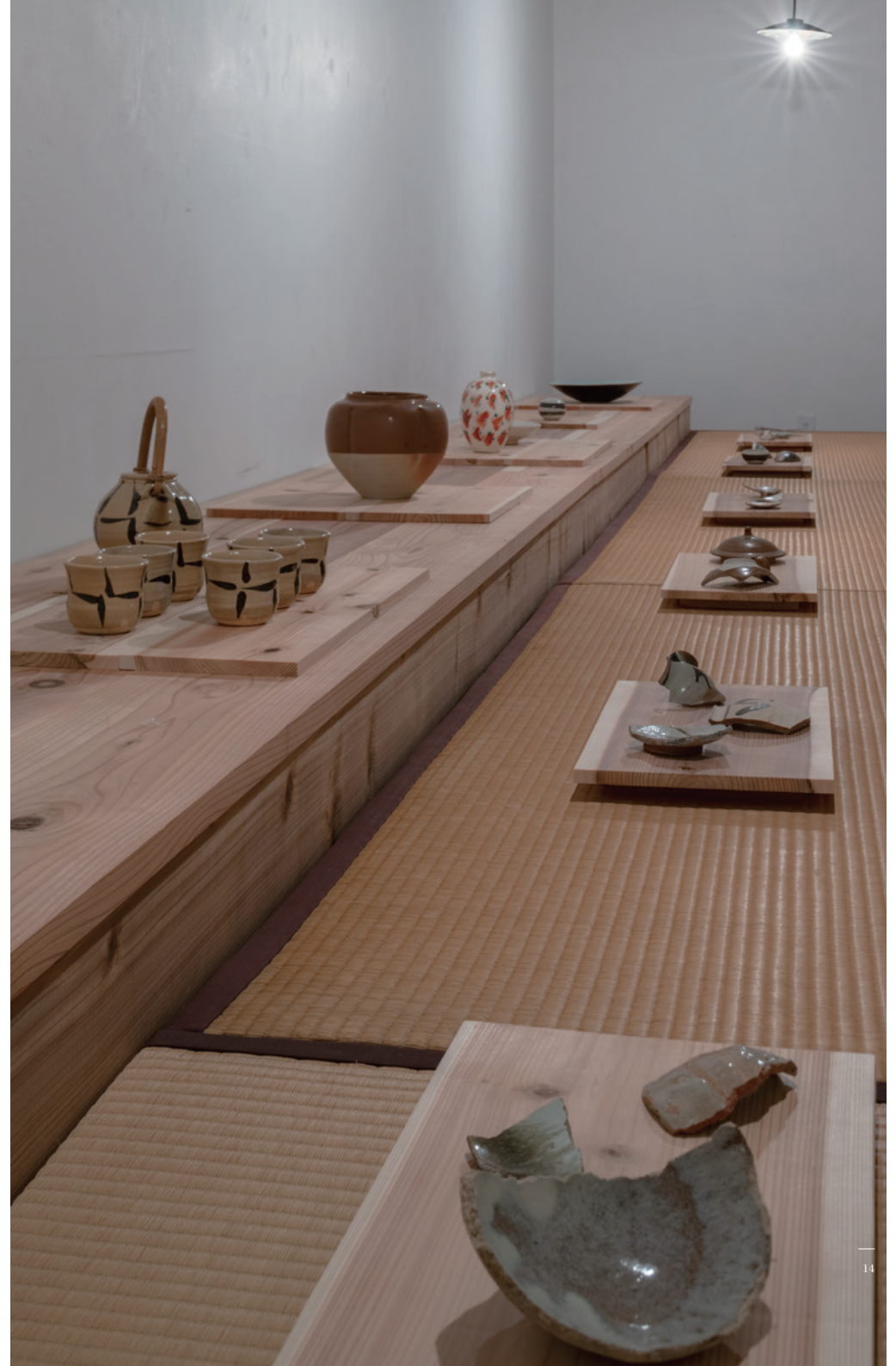






玄関扁額「くあん 羽庵しみずひあん」（清水比庵揮毫）

八瀬陶窯の住家玄関上に掲げてある石黒の号の額。八瀬の地がくぬぎ榊林であったため羽庵と名付けた。



陶片 制作年不明  
八瀬陶窯の登り窯周辺から発掘

石黒宗磨による作品（銀座 黒田陶苑所蔵）

1. 彩瓷鳥文盆 1962年頃

釉彩や彩泥の技法を「彩瓷」と称した。黒と赤茶のチョーク描で三羽の鳥と樹木をデザイン化し描いている。透明感ある淡青釉が美しい。

2. 千点瓷合子 1940年頃

白化粧に黒絵を施したのち、飛鉦の技法で千点文をつけた作品。白と黒の対比が美しい。

3. 赤絵佛文字平茶碗 1942年頃

赤・紫紺・緑・茶・黒の上絵で佛文を描き、その周りにはサンスクリットで詩を書き入れた異色ともいえる茶碗。

4. 赤絵壺 1967年頃

鬼灯の実をデザイン化し、さらに抽象化した文様を赤絵で描く。石黒宗磨の現代性が詰め込まれている逸品。

5. 柿釉水指 1955年頃

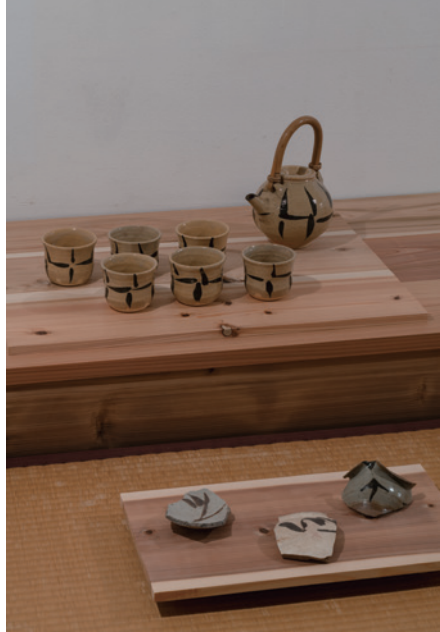
制作初期から晩年までの長い間手がけた石黒を代表する柿釉。落ち着いた渋みがある理想的な発色の柿釉が掛かる阿古佗形をした作品。

6. 番茶器 1936年頃

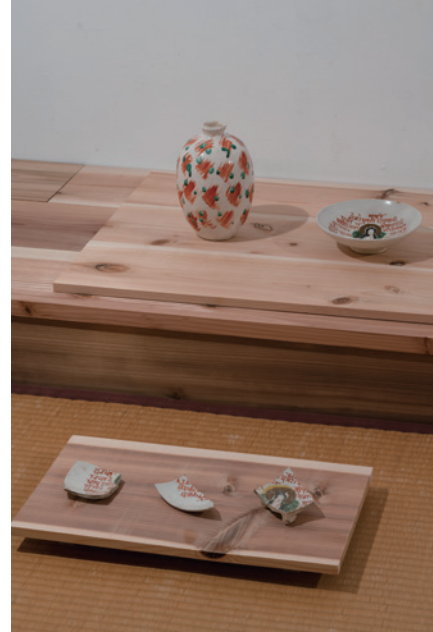
石黒宗磨 43歳の時、八瀬陶窯で初めて作った記念的な作品。信楽土を用いた絵唐津風のこの番茶器セットには、作品と箱に「八瀬初窯」の押印や落款が残されている。

7. 失透釉碗 銘「野分」 1965年頃

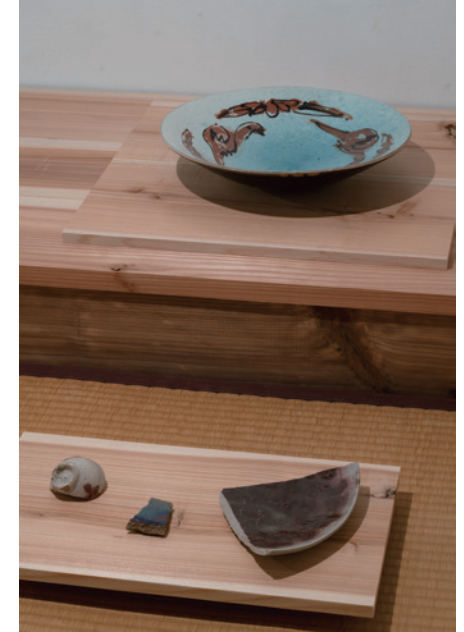
乳濁した釉薬を総称して「失透釉」とした。表千家の即中齋宗匠が「野分」と銘した威風堂々とした茶碗。



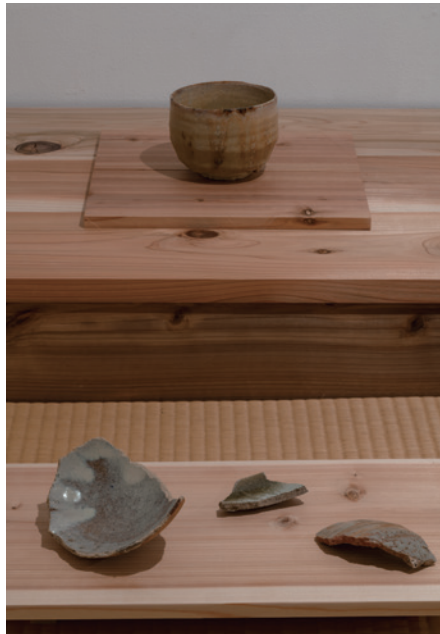
6



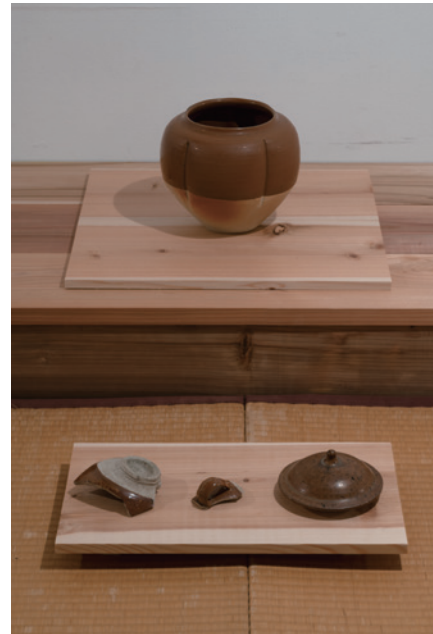
4 / 3



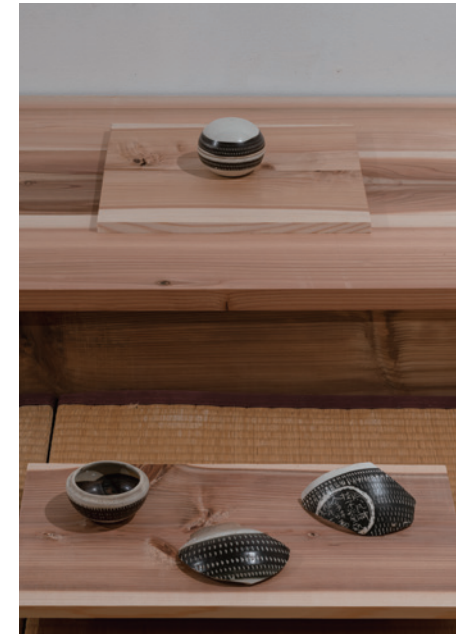
1



7



5



2

## 二、石黒宗磨の陶器作り



### 二、石黒宗磨の陶器作り

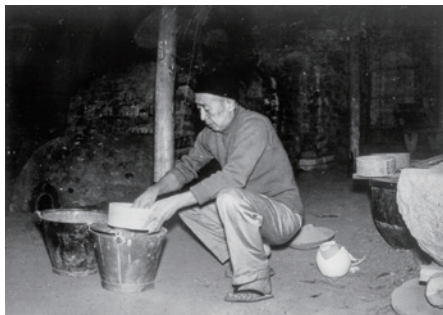
師を持たなかった石黒は古の陶工の作に学び、その高い技術と美意識を理想として追い求めた。石黒はなによりも自身の作陶に厳しく、一度の窯焚きで多くの作品を焼いても人に売るのは4つか5つ程度だったという。気に入らない作品は割り、多くの陶片だけが残った。



陶片 制作年不明

八瀬陶窯の登り窯周辺から発掘。窯の近くに廃棄してあった陶片を収集、整理をするとその数500片以上になった。八瀬での作品をほぼ網羅するこれらの陶片からは、釉薬の厚み、土の質感、高台の造りなど、石黒の手の跡を感じることができる。





提供：射水市新湊博物館



石黒宗麿 作品映像

出典：小山富士夫監修『石黒宗麿作陶五十選』  
朝日新聞社 1972年 4分10秒

八瀬陶窯 資料映像

提供：射水市新湊博物館 4分22秒



### 三、五〇年目の窯出し

京都精華大学では2018（平成30）年から八瀬陶窯とそこに残された陶片の研究を開始した。作陶と暮らしの場と、良しとしなかった作品の欠片からその精神性を紐解こうとするものだ。6月には石黒作と考えられる「木葉天目茶碗」が見つかり、これまで知られなかった石黒の作陶風景を検証するきっかけとなった。



八瀬陶窯 登り窯 模型 2018年  
 諏佐遙也 [ZOUZUO MODEL] 油土 縮尺1:12

**1. ツク**

作品を窯詰する際に棚を支える支柱。昔は耐火粘土で手作りしていた。これも石黒が作ったものであろうか。

**2. 匣鉢**

登り窯での焼成時に作品に炎が当たり灰が被るのを防ぐため、中に作品を収める道具。作品の大きさに合わせて様々な大きさ、形がある。

**3. トチン**

棚板に釉薬がつかないようにするための道具

**4. フロッタージュ**

胴木間の屋根、二の間のサマ穴、露出した壁面の煉瓦から採取





**石黒陶窯の測量調査** 提供：立命館大学・早稲田大学他調査研究チーム

立命館大学・早稲田大学他調査研究チームが今年行った八瀬陶窯（陶窯・工房・邸宅）の考古学的・建築学的調査の成果を公開。登り窯の3Dモデルを動画・パネルで提示し、石黒邸建築、庭園の実測図の他、モデルを自由に動かすことができるインタラクティブ・コンテンツも合わせて展示。



**陶片** 制作年不明  
八瀬陶窯の登り窯周辺から発掘



**木葉天目茶碗** 制作年不明  
京都精華大学所蔵



**石黒陶窯の3Dデータ** 2018年  
考古学的調査の基礎作業として写真計測を行い、色情報を有した精度の高い3Dモデルを生成



オープニングトーク



2018年12月14日 [金]

オープニングトーク「八瀬での石黒宗麿を語る」

会場：京都精華大学ギャラリーフーロール

第一部：木村盛伸 [陶芸家]、清水保孝 [陶芸家]、馬場弘吉 [陶芸家]、森口邦彦 [染色家]

第二部：小野公久 [陶芸ジャーナリスト]

聞き手：米原有二、奥村博美

レセプション（トーク終了後）

会場：京都精華大学iC-Cube（明窓館M-101）

オープニングトークは二部構成でおこなわれ、第一部では生前の石黒宗麿と交流のあった本展実行委員会の木村盛伸氏、清水保孝氏、馬場弘吉氏、森口邦彦氏の4名、第二部では、同じく実行委員で長年にわたり石黒の調査研究を続けている小野公久氏が、本展企画者とともに石黒の来歴やその作品について語り合った。ここでは第一部の抄録を掲載する。

八瀬陶窯での作陶風景

米原 当時の風景写真を見ると、建物や庭の感じなんかは今とそう変わらないですね。当時とちよつと違うのは庭にあったお茶室がもう今はないということ、もうひとつは窯の隣の物置がないということ。ここで生活と作陶をしていたんですね。古い写真には奥様のとう（\*）さんが写っていますね。飼犬と一緒に写真も多いですね。石黒さんという方は、ずいぶん犬がお好きだったんですね。

馬場 そうですね。私が石黒先生のところに行ったのは昭和38（1963）年から亡くなる前年の42（1967）年の12月の末日まででしたが、その頃も犬を飼ってらっしゃいました。奥村 昭和38年だと石黒さんは70歳。馬場さんがおられたのは74歳までですね。

米原 石黒さんの書簡などにはけっこう犬の話題が多かったりと溺愛し

ている様子もみえます。

馬場 私が行っていた当時はもうそんなには興味は持っておられなくて犬の世話はほとんど奥さんがしておられました。あとは私が散歩に連れて行くくらいでした。

米原 作陶についてですが、石黒さんは足がまだ丈夫な頃は蹴ロク口で作陶していたんですね。ただ、晩年はかなり足が悪くなってしまった。

馬場 そうですね、私がいた頃にはもう足を患っておられて、蹴ロク口ではなく、電動ロク口を使っておられました。

米原 今は取り壊されていますが、以前は登り窯の隣に作業場があったんですね。

馬場 そうですね。先生は土は自分で合わせておられました。私がいた頃は稲荷山の辺りで採った砂を混ぜておられましたね。この砂のことを先生は「生砂」とおっしゃっています。それをかなりの量の割合で土

に混ぜて使ってたんじゃないかと。土を揉む時に底がざく、ざくと割れてくるほどで、非常に揉みづらい土でした。

奥村 もともと土はどういう風に仕入れておられましたか？

馬場 鉄絵の作品は普通に市販されている信楽の土に砂と蛙目がいてるを足して使っておられました。赤絵などはまた違う土を使っておられました。

奥村 苔寺から土を持ってきて使っていたというエピソードもありますね。

木村 先生が苔寺に土を探りに行かれる時に誘われて一緒にしました。奥村 そういう時は石黒さんもリュックサックとか背負っていたかあるんですか？

木村 ええ、そうですね。確か、その時は足を怪我されていたと思うのですが、その後、その土でどんな作品を作られたかというのはお聞きしてないんです。先生は土を見る勘を持っていらつしやうかと思えます。

\*1. 名古屋の置屋・鶴屋の芸妓岩佐とうと1921年に結婚。

どの作品を見ても「ええ土使ってはるなあ」と感じますね。

奥村 なるほど。釉薬にしても、柄杓いっぱい釉薬を入れてぎっと扱っていたというような逸話が残っていますね。

木村 らしいですねえ。それは大変なことですよ。実際には、うまく色が出てきた時にはその釉はなくなってしまうというようなことを聞きました。正確に秤で計るようなことはなかったみたいですね。

馬場 先生は頭脳明晰で、勤のするどい方でした。釉を合わせる時も秤はまったく使われない。材料を紙袋から直接、水を張った甕かまにぎっと入れておられました。灰はご自分の風呂場で炊いた薪の灰ですね。それをバケツに入れて水に漬けて。そして、あくる日にバケツの上水を杓ですくって甕の中へばっ、ばっとう入れていく。

奥村 灰は一晚ですか？

に浮かして持ち上げてね。五条から八瀬まではバスが40分ほどかかるもんで、その間ずっと持ち続けているのはしんどかったですね。

米原 森口さんのご記憶のなかにある素顔の石黒さんはどのような方ですか？

森口 私は最晩年だけのお付き合いですから、思い出と言ってもごく一部です。ちょうど昭和30（1955）年前後に日本工芸会（\*3）の初開催に向けた動きがあり、うちの家は京都のど真ん中にありましたからしょっちゅうさまざまな工芸関係者が集まっては会合していました。そうしたなかに「石黒おじいさん」もいました。僕は中学生でした。時間よりも早めにお越しになり悠然とお茶を飲んでいる姿などが思い出されます。

私は、その後留学をしまして41（1966）年の12月に帰国します。そして42（1967）年から日本工芸会に関わるようになり、そこで石

馬場 一晚ですね。あとは、その甕をだーっとかき混ぜて終わり。篩ふるいも甕の中へ突っ込んで、それを3、4回も練り返されるんですよ。杓ですくって別のバケツに入れるなんてことはしない。で、焼くとね、そのところがよく焼きあがるとるんですよ。

奥村 そういっなのは五条の共有窯へ持って行って焼いていたんですよ？

馬場 いえ、私が通い始めた当時は清水卯一（\*2）先生の窯ですね。作品も唐津風ではなく、柿釉ですね。柿釉の壺に筆でちゃっ、ちゃっとう書いたような壺は、今も名品として多く残っていますが、そういうようなものを清水先生のところの電気窯で焼いておられました。ただ、運ぶのには苦労しました。

奥村 バスで運んでいたんですか？

馬場 そう、壺の中に木綿の綿を詰めましてね、でも、バスが揺れるでしょう？ 釉が剥けるといから宙

黒先生とのおつきあひもありました。僕は染色・友禅をやっていたので、陶芸の世界とは関係が無いお付き合いでした。まあ運転手ですね。僕は車に乗っていましたが、先生が車に乗りたい時には僕が迎えに行つて連れて行つてということもしました。漢詩も書いておられるところも時折見ました。先生を思い出すと、陶芸作家というよりは、文人といったほうが正しいと思います。

米原 私たちがイメーজするような陶芸家、職人というような枠を大きく超えていますね。生活全体に美意識が貫かれているような方だったんですね。

奥村 今回の調査では、木葉天目茶碗以外にも発見がありました。まずは登り窯の横から灯油窯が見つかりました。そして、登り窯の手前からは楽窯が見つかった。現在、登り窯は京都市の条例で焚くことはできませんけども、この楽窯は今後の調査次第では焚けるのかもしれない。石



左から：馬場弘吉氏、木村盛伸氏



左から：清水保孝氏、森口邦彦氏

\*2. しみず・ういち（1926—2004）陶芸家、重要無形文化財「鉄釉陶器」保持者。14歳で石黒宗磨に師事。清水保孝の父。

\*3. 公益社団法人日本工芸会。重要無形文化財保持者を中心に伝統工芸作家、技術者等で組織する団体。1955年6月27日設立許可。

清水 私が大学生の時に石黒先生が亡くなられましたので、私が初めて八瀬陶窯を訪ねたのは昭和44(1969)年か45(1970)年頃、先生が亡くなってからしばらく経ってからです。その頃はまだ奥さんがお元気で、庭の畑で作業したりしておられました。私が何うと居間でお茶を入れてくださった。どんな話をしたのかもうあんまり覚えてないですが。

米原 当時からお住まいのご近所の方からも奥さんの思い出話をたくさん伺います。一方で、石黒さんについては見かけることはあっても話したことはないという方ばかり。孤高の人というか、仙人のような印象だったと聞きました。

清水 五条の登り窯に石黒先生がいられたときに私もお顔を拝見してゐるんです。うちの父親と石黒先生が長椅子に座って何にもしゃべらずに、ただ五条通りを行き交う人をずっと眺めている。人も車もそんなに通っ

ました。陶片の整理・研究はその一環です。そして、今年になって八瀬陶窯研究会が立ち上がり、ご縁もあって立命館大学の木立先生を中心とした研究チームに登り窯の測量に一つのご協力を賜ることもなりました。そして、その測量調査の過程で木葉天目茶碗が見つかったわけです。これが大きな発見として注目されることになりましたが、その背景にはこれまでの地道な陶片研究がありました。

米原 これまで京都精華大学は石黒さんの作品を持たず、八瀬陶窯という場と、陶片から多くのことを学んできました。今回、多くの皆様のご協力を得て、また、往時を知る皆様からさまざまなお話を伺って、次第に私たちなりの「石黒宗麿像」が浮かび上がっていくのを感じます。この機会を大切に、今後のさらなる石黒研究に繋げていきたいと思えます。ご登壇いただきました皆様、本日は誠にありがとうございます。

てない時代ですけども。この人たちは何をしてはるんだろう?という感じでした。うちの父親は30代の中頃、先生は60代の後半くらい。私からすると「怖いお爺ちゃんがなんか座ってはる」っていう感じで、なんだかその前は通ってはいけなような雰囲気がありましたけど。なので、私は石黒先生のお顔は何回も見えますけど、言葉を交わしたことはないんです。

奥村 石黒さんは昭和31(1956)年に若手育成の場としての「財団法人八瀬陶窯」を設立されました。そして、同じ頃に電気窯が入ったというような資料があったんですけども、それはあっていいますか?

馬場 昭和31年だと石黒先生63歳ですね。私がいた当時は電気窯はありませんでした。だから、清水卯一先生のところへ行行って焼いておられましたね。

奥村 なるほど。では、ロク口はどうでしょうか?ロク口は68歳の頃ま

でもう蹴ロク口で? 馬場 そう、足を悪くされてからは電動ロク口を使われるようになったと聞いています。

奥村 石黒さんは新しい設備をすぐに取り入れられていたんですか?

馬場 いえ、そうではありません。足を悪くされて、蹴ロク口を蹴ることができなくなりましたから、仕方なく電気ロク口を。

奥村 石黒さんは昭和43(1968)年に75歳で亡くなれています。その後、とう夫人は昭和58(1983)年に亡くなれています。その間がちょうど15年後くらい。そして、平成15(2003)年に財団法人八瀬陶窯より精華大学に八瀬陶窯の土地建物が寄贈されました。以来、15年になります。大学としては積極的な維持管理の難しさを実感する期間でもありました。陶芸分野の教員・学生は、石黒さんが作陶されたこの場所をなんとか活用したい、と考えてま

ずはできることから着手しようとし



#### 【展覧会関連イベント】

八瀬陶窯 探訪ツアー

2019年1月12日 [土]

本展企画者と共に石黒の工房兼住居「八瀬陶窯」を訪問

会場：京都精華大学ギャラリーフール、八瀬陶窯

参加者：約30名

ギャラリーフールにて本展企画者による展示解説を行ったのち、電車と徒歩で八瀬陶窯へ移動。八瀬陶窯では石黒の住居や登り窯、庭園などをツアーの参加者とともにじっくりと探索。石黒宗麿の知られざる生活の片鱗に触れることができた充実したツアーとなった。

# 石黒宗麿年譜

- 一八九三【0歳】 四月十四日、富山県射水郡作道村久々湊八四二番地（現・新湊市久々湊）に生まれる。石黒家は富山の旧家で、医師の父・伯と母・みならの長男。みなは、中越汽車会社を興し、また初代高岡市長をつとめたという笹井甚造の次女。
- 一八九六【3歳】 両親は離婚する。
- 一九〇〇【7歳】 四月 作道尋常小学校入学。
- 一九〇六【13歳】 三月 同尋常小学校卒業。  
四月 放生津高等小学校入学。
- 一九〇八【15歳】 三月 同高等小学校卒業。  
四月 富山県立富山中学校入学。
- 一九一【18歳】 同中学校四年生の時、ストライキの首謀者として放校され、上京して慶応義塾普通部に入學するがまもなく中退する。
- 一九二二【19歳】 石黒家は新湊町大字放生津町一三二六番地（立町）へ転居する。母方の伯父・笹井常之助が経営する中越汽船会社に勤務する。
- 一九二二【20歳】 十二月、金沢野砲兵第九連隊に入隊する。伍長勤務上等兵として除隊までの大半を朝鮮半島の羅南で過ごす。

- 一九二六【23歳】 十一月 同隊を除隊して郷里・新湊の実家に戻る。この頃、父の築いた窯で染焼を試行し、轆轤を覚える。また近くの漢学者片口東江に私淑し、漢学を独学、寒山詩に傾倒し白楽天、李白、蘇東坡らの詩を愛読した。水墨や淡彩の絵も独学し、中峯明本の書風を学んだ。
- 一九二八【25歳】 この頃、鉢山に興味をもち、各地を旅行する。東京美術倶楽部で曜変天目茶碗（稲葉天目）を見て感動し、陶芸家を志す。この頃から「佛山」の号を用いる。
- 一九一九【26歳】 東京・本郷森川町の下宿屋柳生館に移る。後に渋谷区松涛の伯父・笹井常之助所有地に窯を築く。
- 一九二二【28歳】 四月 名古屋屋・鶴屋の芸妓の岩佐とうと結婚する。渋谷区松涛に転居する。
- 一九二二【29歳】 福島県白河に染焼窯を築き、半年近く滞在する。東京に戻って青山に住み、染焼を行う。
- 一九二二【30歳】 春、渋谷区代々幡に移り、窯を築いて染焼を行う。  
九月 関東大震災のために世田谷に移る。  
十一月 陶器商宮崎定次郎のす
- 一九四〇【47歳】 五月 真清水敬四郎（三代藏六）とともに中国東北部や朝鮮半島を旅行する。  
六月 石黒陶房で山田喆・鹿島吉十郎作陶展を開催する。秋、東京で個展を開催する。この頃、木の葉天目の焼成に成功する。
- 一九四一【48歳】 この頃、柿天目、黒定窯、磁州窯、河南天目、木の葉天目などの宋磁の再現技法を一応完了する。富山・黒部の中島邸内に染窯を築き、秋生焼の茶碗などを焼く。
- 一九四二【49歳】 十月 第一回日本輸出工芸連合会工芸品展に〈柿釉丸形無文鉢〉〈青磁壺〉を出品し、前者が商工大臣賞、日本工芸賞を受賞する。
- 一九四四【51歳】 この頃、越中瀬戸焼を試みようとして富山・立山町の吉野香山の庄染窯に通う。
- 一九四六【53歳】 春、小山富士夫や荒川豊蔵らと日本農村工業振興会を設立し、窯業部門の指導員となる。この頃、金沢市沼田町の親戚の二口家に奇寓して染焼を行い、チョーク描の技法を創案する。

- 一九二六【33歳】 秋、妻とうが発病して名古屋の病院に入院し、単身金沢で過ごす。
- 一九二七【34歳】 一月 京都市東山区今熊野南日吉町（通称・蛇ヶ谷）に転居する。まもなく、近所に住み既に東洋陶磁を研究し作陶もはじめていた小山富士夫と知り合い、以後終生の友となる。小山宅の裏庭に染焼を築くなどし、また中国陶磁、特に宋磁に傾倒していく。蛇ヶ谷にすめ、埼玉県比企郡小川町の転居する。小川町では近辺の粘土を用いて染焼を行い、「笠山焼」と称し、宮崎らの世話で委託販売などを行う。  
十一月 後備役として召集され、再び金沢の第九連隊に入るが、翌月に除隊。
- 一九二五【32歳】 十月 富山の染種商田辺久松と知り合い、小川町から富山に戻って田辺宅に一時寄寓する。  
十二月 金沢市郊外の法島に転居し、隣家の登窯を借りて本格的にやきものを焼き始め、伊賀、三島、刷毛目などの本焼を試みる。後に近くの蛤坂に移り、野町の利岡光仙の窯で制作を行い、制作作品を野村右圓堂などで販売する。
- 一九五〇【57歳】 十一月 パリ・テレルヌスキー美術館で開催の現代日本陶芸展に〈白地チョーク描バラ文鉢〉〈失透釉鉄流文壺〉〈紅茶碗〉〈緑褐釉線刻瓜文鉢〉、他に鈎窯の鉢などを出品する。アンドレ・マルローが出品作品の選定を行う。この頃から京都・亀岡の大本教本部を訪ねて花明山窯で制作を行う。
- 一九五一【58歳】 イタリニア・ファエンツァ陶器博物館に日本部が新設されるに際し、清水六兵衛、楠部弥弉、宇野三吾、河井寛次郎、加藤土師明、北大路魯山人、八木一夫、鈴木治らの作品とともに新作が寄贈される。
- 一九五二【59歳】 三月 国の文化財保護委員会から記録作成等の措置を講ずべからし無形文化財「二日目ゆへ釉」保持者の選定を受ける。  
六月 朝日新聞社主催第一回現代日本陶芸展に、パリ・テレルヌスキー美術館での現代日本陶芸展に出品した鈎窯の鉢と、藍彩の小さい壺を出品する。  
国の文化財保護委員会による「二日目釉の技術記録」作成に協

力する。藤岡一が文書記録を作成する。この頃、荒川豊蔵、金重陶陽、加藤唐九郎、宇野三吾らと日本工芸会設立について協議する。荒川豊蔵、金重陶陽らと金沢へ旅行する。

#### 一九五三【60歳】

三月 東京国立博物館で開催の選定無形文化財工芸技術内示展に出品する。  
七月 第二回現代日本陶芸展に〈白地藍彩斑文小壺〉を出品する。  
九月 国の無形文化財選定を受けた京都在任の作家らにより、明石染人らを顧問に迎えて創立された日本工人社に参加する。

#### 一九五四【61歳】

三月 第一回無形文化財日本伝統工芸展に〈木の葉天目茶碗〉を出品する。  
三月 荒川豊蔵、加藤土師明、加藤唐九郎、金重陶陽、小山富士夫とともに伊豆山桃李境で桃里会が結成され、以後数年定期的な会が催される。  
七月 第三回現代日本陶芸展に〈鈞窯鉢〉を出品する。

#### 一九五五【62歳】

二月 文化財保護委員会から重要無形文化財「鉄釉陶器」保持者の認定を受ける。  
五月 東京日本橋・三越で開催の国家指定重要無形文化財日本伝統工芸展に出品する。  
七月 第四回現代日本陶芸展に〈墨流釉小壺〉〈緑褐釉茶碗〉を出品する。

八月 日本工芸会結成に参加し、理事に就任する。  
十月 桃里会第一回展が東京日本橋・壺中居で開催される。

十月 第一回日本伝統工芸展に〈柿釉壺〉〈刷毛目壺〉〈失透釉壺〉〈彩金文鉢〉〈失透木葉天目茶碗〉〈鶯鳴斑茶碗〉〈黒釉葉文茶碗〉〈茶碗〉〈柿天目壺〉〈聯点文平鉢〉〈黒釉平鉢〉〈白磁くみ出し〉十二点を出品する。この頃から号「樹庵」の印を用いる。

#### 一九五六【63歳】

一月「陶説」一月号に「偶感」を寄稿する。  
二月 新湊市名誉市民となる。五月 シカゴ美術館主催日本現代陶芸作家六人展に荒川豊蔵、加藤唐九郎、加藤土師明、金重陶陽、富本憲吉とともに出品する。  
六月 第五回現代日本陶芸展に〈失透釉水指〉を審査員出品する。  
六月 山本貞三、大屋幾久雄とともに発起人となり、私有財産一切を寄付して、若手陶芸家の研究のための財団法人八瀬陶窯を設立し、理事長となる。  
十月 第三回日本伝統工芸展に〈千点文茶碗〉〈梅華皮壺〉を出品し、審査員もつとめる。  
十一月 京都裏千家茶道会館で開催された「新しい陶芸の茶会」に荒川豊蔵、宇野三吾、加藤唐九郎、加藤土師明、金重陶陽とともに出品する。  
六月 第六回現代日本陶芸展に〈柿釉鉢〉を出品する。

#### 一九五七【64歳】

六月 備前に金重陶陽を訪ねる。  
七月 日本が初めて参加する第十一回ミラノ・トリエンナーレに陶磁製品を主題とする構成が組まれ、京都からも十一人の陶芸家が選ばれ、富本憲吉、河井寛次郎、宇野三吾、八木一夫、清水洋らの作品とともに黒い鉢が選ばれる。三月に国内展示される。  
十月 第四回日本伝統工芸展に〈黒釉刷毛目皿五密〉を出品し、審査員もつとめる。(以降度々)

#### 一九五八【65歳】

六月 第七回現代日本陶芸展に〈鶯鳴斑鉢〉を出品する。  
十月 第五回日本伝統工芸展に〈彩瓷壺〉を出品する。

#### 一九五九【66歳】

六月 第八回現代日本陶芸展に〈鶯鳴斑鉢〉を出品する。  
十月 第六回日本伝統工芸展に〈獸文壺〉を出品する。

#### 一九六〇【67歳】

四月 宮内庁(東宮御所)に「柿釉壺」が納品される。  
十一月 朝日新聞に「無心の芸術」を寄稿する。

#### 一九六一【68歳】

二月 京都・パリ交歓陶芸展が

パリ・セーブル製陶所で開催されるのに先立ち、出品作品展が京都市美術館で開催され、出品する。左脚の病気で京都府立医大付属病院に入院する。退院後は、それまでの蹴轆轡に替えて電動轆轡を使うようになる。

四月 第十回現代日本陶芸展に〈茶碗〉を出品する。  
九月 第八回日本伝統工芸展に〈壺〉を出品する。  
十一月 川崎音三を世話役として、荒川豊蔵、宇野三吾、加藤土師明、小山富士夫とともに柏会を結成する。  
十一月 第三回北日本文化賞を受賞する。

#### 一九六二【69歳】

五月 名古屋丸栄で開催の柏会第一回展に出品する。  
九月 第九回日本伝統工芸展に〈鉄釉茶碗〉〈鉄釉壺〉を出品する。この頃から電気窯を使用する。

#### 一九六三【70歳】

四月 国立近代美術館京都分館開館記念展「現代日本の陶芸」に〈彩瓷壺〉〈緑褐釉茶碗〉〈黒釉葉文碗〉〈柿釉壺〉〈失透釉壺〉〈黒釉魚文大皿〉が出陳される。  
九月 第十回日本伝統工芸展に〈壺〉を出品する。  
十月 大阪朝日放送制作「秘伝石黒宗廬」に出演する。  
十月 東京日本橋・三越で開催の現代巨陶展に出品する。

十一月 紫綬褒章を受章する。  
十一月 大阪朝日放送制作「報道特集・この現実」で紹介される。

#### 一九六四【71歳】

四月「月刊文化財」四月号に「私と曜変天目」の記事が掲載される。  
八月 国立近代美術館で開催の「現代国際陶芸展」に〈黒釉茶碗〉が出陳される。

#### 一九六五【72歳】

六月 東京・上野松坂屋で開催の第一回人間国宝新作展に〈鉄絵水指〉〈鉄絵皿〉〈鉄絵壺〉〈鉄絵お預徳利〉〈鉄絵茶碗〉を出品する。  
九月 第十二回日本伝統工芸展に〈鉄絵壺〉〈鉄絵筒茶碗〉を出品する。

この頃、京都 NHK 制作の番組組に出演し、自身の仕事を回顧する鼎談を小山富士夫、今泉篤男と行う。

#### 一九六六【73歳】

四月 第二回人間国宝新作展に〈鉄絵田ノ字鉢〉〈鉄絵共蓋水指〉〈鉄絵壺〉〈鉄絵茶盤〉〈鉄絵石(ハゼー輪指)〉を出品する。  
六月 人間国宝陶芸五人展に荒川豊蔵、金重陶陽、加藤土師明、浜田庄司とともに出品する。  
埼玉県比企郡小川町公民館で開催の石水展に書を出品する。

#### 一九六七【74歳】

大阪・北野病院に入院する。  
四月 第三回人間国宝新作展に

〈鉄絵茶盤〉〈加彩茶盤〉〈青瓷紅彩壺〉〈青瓷紅彩盆〉〈加彩三羊茶盤〉〈鉄絵片口〉を出品する。  
九月 第十四回日本伝統工芸展に〈鉄絵壺〉〈鉄絵鉢〉を出品する。  
秋から翌年にかけて、京都・亀岡に数ヶ月滞り、出口家の梅松窯、東日窯で赤染、黒染、三彩、赤絵などを制作する。この頃から「S」の印を用いる。

#### 一九六八【75歳】

四月 第四回人間国宝展に〈ペルシャ果絵鉢〉〈薄紫釉陶家壺茶羅壺〉〈柿釉金彩草文鉢〉〈柿釉金彩鳥文鉢〉を出品する。  
五月 日本工芸会理事を辞任する。  
五月 東京日本橋・三越で開催の愛隣会創立二十五周年記念の名匠陶芸展チャリティー会場に病をおして出席する。  
六月三日 死去。勲三等瑞宝章を追叙される。  
六月五日 八瀬の自宅で密葬が行われる。  
六月七日 追叙により正五位に列せらる。

#### 一九七一

六月三日 京都・八瀬の妙伝寺に葬られる。戒名は「禪岳院殿陶宗廬大居士」。

小山富士夫監修『石黒宗廬作陶五十選』朝日新聞社、1972

杉原信彦、長谷部満彦監修『陶芸 石黒宗廬作品集』毎日新聞社、1982

乾由明編著『現代日本陶芸全集 第五巻 石黒宗廬』集英社、1982

清水卯一、長谷部満彦、また関係の方々にお話をうかがった。

出典 諸山正則編「年譜」『人間国宝石黒宗廬 陶芸のエスプリ』朝日新聞社、1996(一部校訂)

本研究の起点ともなっている八瀬陶窯の登り窯周辺から発見された約500点の陶片は、石黒宗麿の試行錯誤の痕跡そのもので、なかには石黒の代表作の試作品と考えられるものも多く含まれています。石黒は寡作な作家で、また自身の作陶技法については多くを語りませんでした。そのため、数センチの陶片といえども、そこから読み取れる情報は非常に貴重なものです。たとえば陶片と完成品を並べてみると、同じ黒い釉薬でも、発色や釉薬の垂れ方などの違いで、失敗と成功を分けた石黒の細やかな美意識が感じ取れます。本研究はそうした八瀬陶窯に遺された石黒の作陶活動にあらためて着目し、後世の文化遺産としての活用をはかります。



これまでの研究で陶片の基本分類をおこない、釉薬・技法ごとに【1. 唐津】【2. 鉄釉】【3. 鉄絵・染付】【4. 赤絵・色絵・金彩】【5. 芋版・型押文】【6. 青磁・白磁】【7. 鈞窯】【8. 千文点・墨流し・練り込み・象嵌】【9. その他】の9種に整理している。

京都精華大学は、石黒宗麿が遺した工房・住居「八瀬陶窯」（京都市左京区）を2003年から管理しています。

これまで、陶芸領域の教員・学生を中心に登り窯周辺から発見された陶片群の検証を中心とした調査研究をおこなってきました。

2018年から、横断的な学術領域による調査研究を実施するため、調査研究事業「八瀬陶窯と石黒宗麿に関する研究」（2018年度学内公募研究）をスタートし、その実施母体として学内教員5名による「八瀬陶窯研究会」を発足させました。

八瀬陶窯と陶片群から、石黒宗麿の作陶技法やその変遷、制作活動や人のネットワークにいたるまで複合的な調査・研究をおこないます。

#### おもな研究内容

- ・八瀬陶窯、特に登り窯の構造的側面（とその周辺の在り方）についての調査研究
- ・石黒宗麿が遺した陶片の物資的側面の調査研究
- ・関係者へのインタビューをおこない八瀬陶窯や石黒の活動の意味を明らかにする
- ・史料および、石黒作品の調査研究を実施する
- ・本研究とソーシャルデザイン領域の融合および教育的利用の可能性を探る

#### 八瀬陶窯研究会

米原有二（研究代表者／伝統産業イノベーションセンター長）

奥村博美（芸術学部教員）

斎藤光（ポピュラーカルチャー学部教員）

兼松佳宏（人文学部教員）

中村裕太（芸術学部教員）

2018年6月16日、京都精華大学 八瀬陶窯研究会は八瀬陶窯の登り窯の調査において、第2室から匣鉢に納められた状態の「木葉天目茶碗」を発見しました。

本作品は直径14.5センチ、高さ8センチ。椀底に木の葉を置き焼き上げるこの技法は、石黒が生涯を通して幾度も挑み、実現に至ったものです。

本作品は焼成時に匣鉢と作品の付着を防ぐための目土が付いたままの状態が発見されました。また、石黒が使用していた「棚」の銘印が押されています。本作品は発見時から多くの専門家や関係者のご協力を得て多角的な鑑定作業をおこなってまいりました。

「木葉天目」の技法については、これまで本学が研究を進めていた八瀬陶窯の陶片群にも同様のものがみられ、今後の石黒研究においてさらなる詳細を知るきっかけとなることを期待しています。

八瀬陶窯の登り窯は、石黒の没後からほぼ手つかずの状態でした。2018年度から始まった八瀬陶窯研究会の調査では、立命館大学木立研究室（考古学）の協力を得て窯内の測量調査を実施しています。「木葉天目茶碗」はこの調査過程で発見されました。また、本調査では、登り窯周辺から「灯油窯」や「楽窯」も発見され、これまで明らかになっていなかった石黒の作陶の様子を知る手がかりとなりました。



八瀬陶窯の登り窯の調査において、匣鉢に納められた状態の「木葉天目茶碗」を発見した当時の様子

## 木村盛伸

石黒宗麿先生は人格者で私などが近寄ることができるところではなかったのですが、清水卯一先生と私の兄、木村盛和との関係によりお目にかれました。先生とお二人のやさしさに感謝致しております。

はじめてお目にかかったのは私が登り窯の窯詰めのために仕事場を出入りしております時、入り口に石黒先生と清水先生がおられ、私の作品をご覧頂いた様子で「良いのが出来たね」と言ってくださり呆然と致しました。日本工芸展に初出品の作品です。

石黒先生の作品は昭和30年頃、大阪高島屋美術画廊での工人社展（重要無形文化財保持者の会）に於いて初めて鑑賞致しました。先生ご自身による蹴ロクロによる仕事が力強く、柔らかく、温味のある作品に感動致しました。

私は昭和26年に日吉ヶ丘高校彫刻科を卒業しました。手廻しロクロによる指導を受けた最後の世代でした。その後は電気ロクロになったと思います。その後、私は昭和40年まで手廻しロクロを使用致しました。私自身、不規則な廻転のロクロに魅力を感じております。

石黒先生は陶土を研究され、目的の山から採掘された土を制作に活かす鋭い勘をお持ちでした。苔寺（※編集注…西芳寺）の近くの山土を採掘されるのを原清さんと一緒に誘われました。この土で何を作られたかお聞きしていません。

私が昭和42年夏に兄、盛和から独立させてもらい岩倉・木野に築窯し、秋に原さんがお祝いに寄って下さった時、先生も一緒に一緒にお越し下さりました。裏山の地土のテストをご覧になり南蛮によいとご教示いただきました。展覧会の出品作品をと思い南蛮に白黒の象嵌を制作致しましたが昭和43年6月3日に間に合わず、見ていただくことができないままに誠に残念でした。

日本の伝統工芸文化は自然の形をすばらしい技術によって制作されるものです。石黒先生は、衣食住が世界に広がり、生活に素直な豊かな精神が生まれることを願っておられたのではないかと思います。

### 木村盛伸 KIMURA Morinobu

1932年京都・五条坂の絵付師、木村聖山の三男として生まれる。兄、盛和に師事する。石黒の勧めで第5回日本伝統工芸展に初出品し入選。



ゴブサクターです

奥村先生のお話「なる」  
何年過ぎたのか……?

今もあの時は思い出し……

佐・立房、外にのほり窯、楽窯は  
こうかんまるり、フ川、目、バ!!

私は全体が石黒さんだ!!

と感じた

石黒先生は近々会います

楽窯の話 聞くと見ます

鯉江良二  
分

鯉江良二 KOIE Ryoji

陶芸家

1938年愛知県常滑市生まれ。スペイン、韓国、オーストラリア、アメリカ、イギリスなど多くの国、地域でワークショップを開催。京都精華大学においてワークショップ、八瀬陶窯訪問。

## 清水保孝

石黒先生が逝去された年は1968年で私は大学3年生でした。

西芳寺で告別式が執り行われたときに、父の清水卯一を私の車に乗せて告別式に参列した記憶はありますが、石黒先生と直接交流した思い出はないのです。

ただ亡くなる年か、前の年かはわかりませんが、京都の大丸百貨店で日本工芸会や日展といった所属団体を超えた展覧会があり、先生が出席しておられ、お帰りになるときに、先生の手を支えてお送りしましたが、先生の手がとても温かったことを鮮明に覚えています。

それが先生と接した初めてで最後の思い出です。

石黒先生が八瀬から五条によく来られていたことも記憶しています。私が小学生か中学生の頃に学校から五条の家に戻ると、石黒先生と父が店の中のソファーに座っておられました。二人とも寡黙な方でしたから、何を話るともなぐずつと五条通を眺めながら佇んでおられました。今思うと、それは先生が八瀬で作られた作品を、父が窯入れしていた五条の共同登り窯へ入れるために持ってこられていた

のだと思います。

作陶を始めた私は石黒先生の作品にずっと魅力を感じて惹かれております。作陶し始めた頃は絵高麗や三彩の作品を参考にさせてもらい、チョーク描きや赤絵に至るまで先生の影響を受けております。

石黒先生がなくなられた後、奥さんに呼んでいただき、よく通っております。何の用事で呼んでいただいたのかは思い出せないのですが、寄せていただくといつも居間でお抹茶と虎屋の羊羹を出して下さり、何とはなしにお話を伺っていたのですが、「保孝さんは石黒の作風を継いでくれていますね」と嬉しそうに話ってくださいました。

今でも作陶に悩んだときは石黒先生の図録を見ながら、何か参考になることはないかと思案しております。

### 清水保孝 SHIMIZU Yasutaka

陶芸家

1947年京都市生まれ。父、清水卯一が石黒宗麿に師事。卯一は石黒がこの世を去った後、八瀬陶窯の維持管理に尽力した。

## 馬場弘吉

私が八瀬の石黒先生宅へお手伝いに通ったのは昭和38年4月から42年末までの二期に亘る4年余りである。

初めて先生宅を訪れた際、その威厳に満ちた姿に圧倒されて体がこわばり、頭も真っ白になった。ともかくお伺いした事情を告げてすぐに失礼しようとしたところ、思いがけず「明日から来てよいぞ」と仰り、慌てて「はい……」と返答したのがきっかけだった。

さっそく次の日から通い始めたものの、家業である日常の風景とは全く異質な環境に戸惑った。先生はほとんど寢床で横になってタバコを燻らせておられる。それは暫くして作品の構想を練っておられることに気付くのだが、この状況では、いつ仕事に掛かれるかわからないので、意を決して盆と正月以外は毎日休まず通うことにした。

当時、先生はすでに左足が不自由だったが、いったん仕事を始められると焼成に至るまで一気に流れるように作業を進められた。

客間兼工房でのロクロの水挽は、ほとんど手に泥を付けることなく、素早い手捌きで見事だった。鉄絵の絵付けにして

も、生素地にササッとチビた筆を動かされると途端にグツと生気を放つといった具合で、常にとのような場面でも迷ったり躊躇されることは無かった。

さらに抜群に明晰な頭脳を持つておられ、その鋭い直観力で一瞬に対象の本質を見抜き、そこから得た感動を糧に次々と新しい作品に挑戦された。

先生は書画に於いても卓越した能力を発揮され、数多くの作品を遺されている。ここでは折々の哀歎に満ちた心情をありのままに切々と漢詩に託して詠われ、真に迫ってくる。

その書画を含めた数々の作品は奥深い独自の境地を秘めており、言葉では言い尽くせない魅力がある。本当に焼きものを愛し、高い見識眼を具え持つ人は、この心に染み入るような味わいに魅了されるだろう。

私がお仕えた晩年に、さまざま技法を駆使して多くの名品を生み出されたことは望外の喜びである。さらに芸を愛し、芸に遊び、芸に立ち向かわれた先生の下で修業させていただいたこの数年間はまさに至福の刻であったと深く感謝している。

初冬のある日、夜半に窯を焼き終え、正面にそびえる四明岳の真上に昇った満月を仰ぎ見た瞬間、その周りに漂う凜とした清涼感が先生の姿と重なり格別に美しかった。

先生の作品はいつまでも天高く煌々と輝き続け、必ず百世に伝わり、人々の心奥を潤すだろう。

### 馬場弘吉 BABA Kokichi

陶芸家

1941年京都市生まれ。晩年の石黒に師事した。

## 森口邦彦

石黒先生は陶芸家というだけじゃなく、詩も絵もすべてを楽しんでおられました。また、あれだけのお仕事を悠然とやられているところもすごかった。

しっかりとした個をお持ちになりながら、その個が家庭や社会というものの中にちゃんと位置付けられた文人作家でした。それは、「茶碗やさん」や「陶芸家」という枠ではなかった。文人であり、作家でした。

明治以前の文人たちが大切にしていた精神性のようなものをお持ちでした。それは、現代の日本が全く評価をせぜがないがしろにして捨て去ってしまった日本文化の大切な部分でもあります。

現代の文化でよく語られる「個性」や「独創性」というようなものとは明確に違うものを大切にし、追い求めておられた。現代のように好きだ嫌いだ、暑い寒いというようなそんなくだらない個ではない、もっと崇高なものです。

八瀬陶窯から出てきたたぐさんの陶片を見て、そうした先生の精神をあらためて実感しました。ひとつの技法を極めるとまた次へ。どこにも止まらない、何にも満足できない

い。手仕事の極みを次から次へと求めるその姿勢に、近寄り難い人間の崇高さを見ました。

僕は先生とは最晩年だけのお付き合いでしたが、そうした生き方に接することができた記憶を大切にしています。

### 森口邦彦 MORIGUCHI Kunihiko

染色家／重要無形文化財「友禅」保持者

1941年京都市生まれ。京都市立美大（現：京都市立芸大）日本画科卒業後、パリ国立高等装飾美術学校でグラフィックデザインを学ぶ。帰国後は父、森口華弘に師事して友禅を学ぶ。日本工芸会副理事長等を歴任。石黒と父・華弘に親交があったことから、青年期に最晩年の石黒と交流を持った。

## 米原有二

## 民藝の時代 ―石黒宗麿と柳宗悦／石黒書簡から―

石黒宗麿が八瀬に住まいと工房を移した昭和11年、東京・駒場に日本民藝館が開館した。大正14年に柳宗悦らが「民藝」という視点を表明してから11年。日本の工芸界はかつて埋もれていた民衆の手仕事に視線を注いでいた。

石黒と柳は互いの言説に反発し合っていた。たしかにあらゆる古陶磁の技法を吸収して自身の作陶を高めようとした石黒は技巧派の極みであって、柳が唱えていたように「無作為の美」を手仕事の至上とすることとは正反対だ。柳の見識で発見され、その美のありようを再定義された手仕事はかつての「下手もの」であり、石黒が作陶人生において追い求めたのは千年以上にわたり「上手もの」と

された至上の美だった。

柳に言わせれば、石黒の作陶は古陶磁の模倣に過ぎず、技術だけのものだった。

柳は誌面上で公然と石黒の作品と作陶姿勢を否定した。それに対し、石黒は公の場では一度も柳についてふれていない。ただ、石黒の未発表ノートのなかに、柳について書かれた一文がある。

「柳さん程私を憎んだ人は珍らしい、然し私は憎まれゝは憎まれる程柳氏を尊敬した、何故かよつぽど恐ろしかったのであらふ、私のやって来たこと、しなかつたやりつゝあることに一寸の油断を与へなかつたまだ世間的にも知られていない蛇ヶ谷時代に 既にあの人は私を敵視し

た、これは柳さんの目の確かさと其将来を見通しておられたことに依るそれだけに私は誰よりも心では尊敬した……」

柳の死後で、石黒の晩年近くに書かれたものと推測されるこの文には、石黒自身の強烈な自信しか記されていない。言葉では尊敬と言うが、内容的には柳の民藝運動を児戯扱いしている。これは石黒の本心のままに書かれたものか、それとも後年この一文が公開されることを想定して、柳の思想に共鳴した社会に精一杯の皮肉を残したのだろうか。

ただ、民藝運動が興った当初には、柳の視点に一定の社会的価値があったことを石黒は支援者に宛てた書簡に残している。序盤は民藝運動の現状をけなし、中盤ですこしだけ「流行るのもわからんでもない」と理解を示し、終盤でまた落とす。石黒らしい歯に衣着せぬ文だ。

「……帝展以上の害毒を民芸派によって撒布されてるのだから この

情熱を捨て、直に悟道に入っては私自身インチキに列する、デリケートなものゝ内から深さとか広さとかいろ／＼なものを見たのは十年前のことであり、そして首肯し易すかつた、難解でなかつた丈けに伝播力をもっていた それ丈けにまたグーにもつかぬものであった、何とかステキなキザなほめ言葉を要求した、有閑マダムがストープをかこんでやる様に……」（昭和9年1月19日消印 武内潔真宛）

石黒は個人的な書簡で幾度も濱田庄司や河井寛次郎を批判しているが、その矛先は技術ではなく、作陶における思想的背景がほとんどだった。つまり、民藝運動の思想が作家の作陶風景に入り込んで影響していたことを嫌っていたのだ。

書簡において石黒は柳の言説を「宗教」と批判し、このように続けている。「……鉢やカメが並んでいるのを見て 健康な姿だとか 彼は永い間の働き手だなんてロマンチック

になつて眺めている気になれない、ユートピアンは歌を唱い 詩を作つてればよいかも知れないが 僕は仕事がある……」（昭和9年1月1日消印 武内潔真宛）

柳の思想や見識眼がどうであれ、石黒がもつとも嫌つたのは、柳が民藝的思想・作風を至上とし、それを作り手たちに指導したことだろう。

これは、石黒の工芸に対する観念を知る手がかりとなる。書簡から、石黒は手仕事における当事者は作り手自身のみであると考えていたことが読み取れる。だからこそ、当事者以外の何者であっても制作の領域へと踏み込むことを強く拒んだのではないだろうか。また、技術の極みを追うことこそが工芸の意義であり、そこには無作為や情緒の入り込む余地はない。当然ほかの作家たちもそうあるべきだと考えていたのではないだろうか。

民藝運動からおおよそ100年。この数年は戦後幾度目かの民藝ブーム

に作家も職人も産地も販売者も消費者もメディアも大いに沸いている。しかし、柳や石黒が生涯を通じて考え続けた「つくること」と「生きること」を、「ていねいな暮らし」だけで消費してしまうにはあまりに惜しい。今を生きる私たちは、先人の歩みをもとに手仕事の美のありように、どのように対峙するのが、問われている。

八瀬陶窯の母屋玄関に今も掲げられる「棚林」の扁額は黒田辰秋が彫つたものだという。

参考文献  
小野公久監修『石黒宗麿書簡集』射水市新湊博物館、2000  
小野公久『評伝 石黒宗麿 異端に徹す』淡文社、2014

## 米原有二 YONEHARA Yuji

1977年京都府生まれ。京都精華大学伝統産業イノベーションセンター長。京都を拠点に工芸を対象とした取材・執筆活動をおこなう。おもな著書に『京都職人 - 匠のてのひら-』『京都老舗 - 暖簾のこころ-』（ともに共著・水曜社）、『京職人ブルース』（京阪神エルマガジン社）など。

## 奥村博美

## 八瀬のこと

2011年、常滑の陶芸家鯉江良二先生のワークショップを陶芸コースで開催した時に八瀬陶窯に案内したのですが、登窯の覆屋は崩れかけ、母屋の工房も屋根裏に住んでいる小動物の糞だらけ、水回りの床も落ちかけていて、この姿に大変悲しみ憤慨されました。

精華大学が管理してから5年以上付かずの状態でしたが、この日から陶芸コースとして八瀬陶窯の活用を考え始めました。

まず窯周辺に廃棄してあった陶片を収集したところ八瀬での作陶をほぼ網羅しており、釉薬や断面の厚み、器内部の処理、高台の造りなど、ひとりの作家の手の跡を生で感じることができました。

多くの方々のお力添えにより今回の展覧会を開催することが出来たのです。

焼き物は形が出来て終わりではなく、土や釉薬の選択、焼成方法などが一つになった時に作品として成立するもの、打ち割って陶片として残っているものは石黒宗麿の美意識から外れてしまったものなのでしょう。

いろいろな技法を使い制作に取り組むことは作品の完成までがテストであり、作り手としては大変面白く有意義な時間です。八瀬の大量の陶片は完成作品を支える大きな大地だったと思います。

唐津の陶片が多く、石黒宗麿は唐津がすぎだったのだ、大きめの壺の内側には釉薬がかかってなくてこれは生掛けだったのかな、サンスクリットの文字が描かれた上絵の作品が複数あり、どこかのお寺に数を納めたのだろうか、など

八瀬陶窯の魅力を多くの人に知ってもらいたいと思い、500点余りの陶片を母屋に展示して手にとって観察できるようにしたところ、多くの陶芸家、ギャラリイ主催者、愛陶家の方々が見学に來られ、八瀬陶窯の今後について気にかけていただきました。

2017年には日本工芸会近畿支部会合を八瀬で開けないかと問い合わせがあり、清水、馬場、木村先生の座談会を含め、30名近くの方に参加していただきました。また同年に銀座黒田陶苑の黒田佳雄さんが見えられ、宗麿作品と陶片を同列に並べれば興味深い展示が出来そうだと話が弾み、是非京都と東京で展覧会を開催しよう

いろいろな想像してしまいます。

その中に木葉天目の陶片も三點ありました。

その内の一点は綺麗な発色をしていたけれど、石黒宗麿にとって木葉天目の価値は木の葉の発色だけではなかったようです。

今回の調査で灯油窯、楽窯の発見があり、登り窯の横に設置された電気窯を含めて石黒宗麿の作陶姿勢が現実のものとして目の前に現れました。

母屋の仕事場にある囲炉裏の炉縁には陶片が嵌めこまれ、襖の引き手も焼き物で作られています。

八瀬陶窯は物作りを志した人間の生き様を肌で感じることが出来る場所です。

なりました。

今年に入り、立命館大学木立先生が京都五条坂に残っている登り窯測量調査をされると聞きし、八瀬陶窯の窯もお願いたいと申し出たところ快く引き受けてくださいました。

測量調査をするために土砂で埋もれていた胴木周辺を整えていたら灯油窯、楽窯が見つかり、物置と化していた窯内部を整理中、匣鉢の中にポツンと木葉天目茶碗が入っていたのです。

その後早稲田大学余話、田畑、ナワビ先生を中心に登り窯3D測量、青山学院大学黒石先生のもと母屋工房の測量、庭の植栽調査が為され、貴重な資料が完成しました。

## 奥村博美 OKUMURA Hiromi

京都市立芸術大学陶磁器専攻科修了。京都精華大学芸術学部教授。京都工芸美術展大賞、同展優秀賞。焼き締め陶公募展記念賞。淡交ピエンナーレ茶道美術公募展奨励賞。京都工芸作家協会展奨励賞など受賞。他個展多数開催。

## 齋藤光

## 文脈を考えるとということに向けて

石黒宗磨(1893～1968)の陶芸における出発点を、いつ、どこに置くべきなのだろうか。

どの時点/地点を選ぶかは、たぶん立場によって異なってくるであろう。ただ、京都への移住が、石黒の活動にとり重要な意義を持つ、ということについて異論は出ないのではないか。

石黒についての最も優れた評伝を書いた小野公久によると、石黒がいつ京都に来たかについては2説あるという。小山富士夫は、昭和2年、1927年4月に金沢から移住してきた、としているようだ。小山の証言は、京都での石黒の初期の活動などを考えると、かなり重いものである。小山と石黒の京都における出会

いに、大きな意味があるからだ。

これに対して、小野は、資料を基に、昭和3年、1928年春に移住したのではないかと考えている。『評伝 石黒宗磨 異端に徹す』(淡交社、2014)も、その線で記述されている。1927年8月11日の消印がある石黒の書簡が残っており、その内容や差出地から判断すると、このとき石黒は金沢にいたと推定できるからだ。つまり、小野は、小山が一年勘違いしたと考えている。小野のいうことの説得性は高い。

ただ、もう少し物証がほしいというのが、小野の意見でもあるようで、「石黒宗磨と八瀬陶窯―五〇年目の窯出し―」展で講演された時

ることができるようにしてみたい。

## 第一次世界大戦(1914～18)

は、日本に好景気をもたらし、経済は急速に膨張したといわれる。しかし、20年代に入ると反動で不況に見舞われ、23年の関東大震災は悪い状況に拍車をかけた。京都東山の陶磁器工業界も価格の下落や賃下げがあり、陶磁器工は、1922年に組合を結成する。その陶器工組合は、20年代、活発に活動を繰り広げた。

1927年3月、衆議院予算委員会での片岡蔵相の失言がきっかけで、金融不安から金融恐慌となる。京都でも、金融機関の閉鎖や休業が起き、混乱した状況となっていた。同月の7日には、丹後地方で大地震が起き、5月頃まで、京都の社会や経済は混乱していたといわれている。ただ、諒闇明けをへて、翌年、1928年11月に、昭和天皇の大礼が京都で行なわれることになり、期待感も一気に高まったとされている。

も、このことに触れていた。

さて、石黒の活動を考えていくうえで、彼の生きた個人史とその周辺だけではなく、彼をも含むより大きな文脈も興味深いし、大切なのではないだろうか。

そうはいっても、文脈にはいろいろな相やレベルが存在している。たとえば経済的文脈、社会的文脈、文化的文脈など。このうち文化的文脈でいえば、石黒の活動は、「民藝」の諸活動と連関しており、その文脈をどうとらえ、石黒との相互性をどう押さえるかは、かなり重要な問題であろう。

経済的文脈や社会的文脈は、どうか。陶芸活動も、経済的文脈や社会的文脈から離れては存在できない。生活自体はなおさらである。

そういうこともあり、1920年代後半の京都や日本の「文脈」を簡単にまとめ、その文脈の中で石黒は生きていたのだ、と想像力を働かせ

その後、1930年、経済の弱体化が進み、京都でも大きな争議が頻発していた。

石黒の京都移住は、こういう経済的な文脈に囲まれたものであった。注目しておきたいことは二つ。一つは、1927年の春は、京都は経済的社会的混乱にあり、移住には適していなかったのではないかと、という点。もう一つは、石黒が移住したとき、京都の陶磁器界では、労働運動がかなり活発だったということである。特に後者は、どういう関わりを石黒にもたらしたのか、興味深い。全く無縁だったのか、それとも、何らかのつながりがあったのか。もしつながりがあったとして、それは意味あるものだったのかそうではないのか。

文脈をまとめたことで、少し別な結節が見えてきそうな気がしている。

## 参考文献

- 京都市編『京都の歴史9 世界の京都』学藝書林、1976  
 京都市編『京都の歴史10 年表・事典』学藝書林、1976  
 講談社編『昭和 二万日の全記録 第1巻 昭和への期待 昭和元年～3年』講談社、1989  
 佐藤裕一『フランスア喫茶室 京都に残る豪華客船公室』北斗書房、2009  
 神田文人・小林英夫編『昭和・平成 現代史年表〔増補版〕』小学館、2009  
 小野公久『評伝 石黒宗磨 異端に徹す』淡交社、2014

## 齋藤光 SAITOH Hikaru

京都大学理学部・北海道大学大学院・東京大学大学院卒。京都精華大学ポピュラーカルチャー学部教授。生物学史・性科学誌・近現代文化誌などを研究。著書に『幻想の性 衰弱する身体』、共編著書に『性的なことば』など。最近、「京都のノと尖端少女」というテーマでモダニズムを調査中。また、日本の「カフェー」ジャンルを研究中。さらに、日本の分子生物学の歴史や生命倫理もリサーチ中。

## 兼松佳宏

「プロの独学者」  
としての石黒宗麿論

僕は石黒宗麿のことを何も知らなかった。1955年にはじまった「重要無形文化財保持者制度」で、最初に指定を受けた日本初の「人間国宝」のひとりである。

しかし、陶芸の世界では伝説レベルの巨匠であっても、世の中全体でいえばそれほど知られていない。例えば、同時期に人間国宝として認められた陶芸家の富本憲吉や濱田庄司と比較してみても、TwitterやInstagramで話題になることは少ない。

急にその風向きが変わったのが八瀬陶窯での「木葉天目茶碗」の発見であり、それを祝う形となったギャラリーフロールでの展示だった。「これ気になってるやつ」「ツアーもあってとても面白そう」。こうして石黒

宗麿がカジュアルに「再発見」され、その普遍的な価値は次の世代にも受け継がれていくことになった。もちろん、何も知らなかった僕自身も含めて。

展示の目玉はもちろん、窯で焼かれたあと取り出されずに残されていた木葉天目茶碗である。その吸い込まれるような美しさは、陶芸に明るくない僕にとっても何か感じるものがある。50年後にタイムカプセルとして日の目を浴びることになったのは、まさか意図的ではないだろうが、その粋な計らいを「何とも石黒先生らしい」と懐かしむ人もいた。

その上で、会場の構成として来場者に暗に放たれていたメッセージとは、幾種もの膨大な陶片の前に、石黒宗麿の生々しい葛藤と向き合うことになったように思う。人間国宝という多くの人にとっては遠い存在の手によって作られた、誰でも自由に近づくことができる開かれたそれらの陶片は、出来栄えに納得がゆかず自ら割ったものなのか、数十年の時揺られて割れてしまったものなの

かはわからない（実際に八瀬陶窯のすぐ側では治水工事が行われていた）。

それでもひとつだけ確かなことは、多種多彩、融通無礙、つねに故きに学び、斬新な手法で世間を驚かせてきた石黒宗麿の圧倒的な質を支えていたのは、気高い理想に近付かんとする圧倒的な思索と試作の量であった、ということ。厳しい目をくぐり抜けて、いよいよ形を留めることができた完成品の澄み渡る美に、野暮な痕跡は残されていない。しかし陶片ひとつひとつに宿る葛藤の日々が、その魂の濃度が、私たちの魂にも響き入る。

彼の理想とは「器の中に宇宙が見える」とも評される「曜変天目」の再現だった、といわれる。現存する曜変天目茶碗は世界でわずか3点、すべてが日本の国宝指定という究極の器である。

25歳のときに「稲葉天目」を目にして心が震え、そこにあった「窯の偶然がなしたもの」という解説に思いがけず反発し、「これが人の手になるもの

であるなら自分も同じ物を作りたい」という、本人曰く「非常に傲慢な考え」によって、石黒にとっての陶芸の道は開かれたのだった。そしてそれは、厳しく険しい独学の道でもあった。

1996年にサントリイ美術館で開催された『人間国宝石黒宗麿 陶芸のエスプリ』（朝日新聞社、1996）の目録で、当時の福島県立美術館長・長谷部満彦氏はこう記している。

陶家の出でもなく、まったくの素人から作陶の道に入った宗麿はアマチュアの自由さを非常に大切にしていたように思われる。（・・・）因襲的な陶家の社会におもねることもなく、師もなく弟子もなく、一人自由に学んで陶技をしだいに多彩なものに広げていった。しかも自ら成しとげた成果に安住することを拒む貪欲さで、絶えず如何に表すべきかを自問しながら制作を続け、次々と独自の陶芸世界を築きあげていったのである。

きっと彼が座右に置いた根源的な問いは、彼が制作したものをいつも上回っていたのだろう。プロフェッショナルを凌駕するほどのアマチュアであった石黒にとって、偶然を必然に、不可能を可能にする方法を教えてくれる師匠のような人はいなかった。ただひたすら、縄だけで木を断つほどの時間をかけて、身を投じるしかなかった。そんな石黒宗麿の凛とした背中が、いまなお葛藤中のすべての独学者を勇気づけてくれるだろう。それはもちろん、僕自身も含めて。

とはいえ、本当に「師」はいなかったのだろうか。

唯一の弟子である清水卯一氏は、「石黒先生は宗教について一度も口に出すことはなく、むしろ無神論者みたいでしたが、何か仏さんへの信仰があったような気がします」と語っている。そして、「20代のころに『佛山』という銘を使っていたのも、何か思うところがあったのではないでしょうか。先生自身、仏様のように心優しいお方でした」とも。

## 兼松佳宏 KANEMATSU Yoshihiro

1979年生まれ。ソーシャルデザインをテーマとするウェブマガジン「greenz.jp」の立ち上げに関わり、10年から15年まで編集長。2016年、フリーランスの勉強家として独立し、現在は京都精華大学人文学部特任講師として、ソーシャルデザイン教育のためのプログラム開発を手がける。著書に『beの肩書き』『ソーシャルデザイン』、連載に『空海とソーシャルデザイン』『学び方のレシピ』など。



## 中村裕太

## 石黒宗磨の陶片

長年使っていた土鍋が割れた。いつものようにコンロに火をかけて水炊きを準備していると、鍋の底から出汁が吹きこぼれた。かれこれ十数年前に「僕には大きいから」と恩師から譲り受けた越前焼の土鍋である。鍋の蓋には鉄絵で大きくカニが描かれている。鍋底を洗うたびに貫入が深まっていくのに見惚れていた。ところが、鍋底にひびが入りはじめた。たたいてみると、鈍い音がした。お粥を炊いてそのひびを埋めようとしたけれども、もう手遅れだった。陶片の断面は黒く焦げ付き、土の中から出てきたものに見えた。

石黒宗磨（一八九三—一九六八）は、一九三六年から七十五歳で歿す

るまでの三十三年間を京都洛北の八瀬で過ごした。主屋は、茅葺きの寄棟作りで、土間、居間、水廻りという簡素な間取りである。十畳ほどの土間が仕事場である。石黒は日本、朝鮮、中国といった東洋古陶磁に自らの陶器作りのルーツを見出し、その再現を試みていた。「膝の片方に小山先生から貰った出土陶片、もう片方に出来上がったばかりの碗を載せ「出来た、出来た」と、奥さんと抱き合って喜んでおられました」という清水卯一（一九二六—二〇〇四）の証言が残されている（小野公久『評伝 石黒宗磨 異端に徹す』淡交社、二〇一四年）。この「出土陶片」とは、当時親交を深めていた陶磁研究家・陶芸家である小山富士夫（一九〇〇—一九七五）から譲り受けた北宋時代の磁州窯の陶片と思われる。中国の河北省南部の邯鄲市鉅鹿は、一一〇八年に黄河の大洪水によって沈んだ町である。一九二〇年の干ばつの時に深く井戸

きのように見えてくる。

み、造りのたしかなさと柔軟性、そんなものに感心させられていたという記憶がある」と記している（八木一夫『懐中の風景』講談社、一九六七年）。石黒は磁州窯の技法をもとに千点文の茶碗や鉢、蓋物を作り出したが、釉薬、形、模様は独自のものがある。八木は一九四八年に走泥社を結成し、オブジェ焼へと進んでいくが、晩年に作った千点文の湯呑みには、石黒と通底した古典に対する解釈を見出すことができる。

石黒が八瀬で暮らしていた当時の写真をみると、土間の囲炉裏には、莫塵が敷かれ、鉄瓶に湯が沸かされている。囲炉裏の炉縁は、レンガの寸法をもとにしたやきもので組まれ、上面と側面には淡い緑釉が施されている。炉縁が破損した箇所は、石黒の陶器と思われる数個の陶片で補修されている。そのうちの二箇所には、白化粧で象嵌された魚紋の陶片が埋め込まれている。目玉が二つ並んで、囲炉裏で焼かれたアジの開

を掘ったところ、多くの陶片が出土した。磁州窯は庶民の生活雑器であり、白化粧した素地に黒泥を掛け、黒泥のみを掻き落とす技法が見られる。石黒はそのなかでも「千点文」と呼ばれる模様の再現を試みた。そして、その模様がロクロのおどりによってリズムカル刻まれていることを突き止め、弾力の強いカンナ（時計のぜんまいを伸ばしたものを）を用いて削ることで再現して見せたのである。

石黒は古陶磁の「写物屋」として語られがちである。ただ、若かりし八木一夫（一九一八—一九七九）はそれだけではないことを気づいていた。八木は、一九四七年頃に青年陶作家集団の仲間と連れ立って八瀬に石黒を訪ねている。「そのときの私は、石黒さんの仕事の裏うちとなっているはずの、「古典」という古色の型を感じたりはしなかった。むしろ、作者個人だけにとどまらず、現代そのものにも生きていく感覚や、瀟洒な好

かを窯道具や登り窯の模型を通してみていく構成とした。匣鉢のなかからでてきた茶碗にはまだ目土がくっついている。

石黒にとって古陶磁の陶片は写し取るものであり、他方で自作の陶片は、埋めるべきものだったのかもしれない。だから五十年ぶりに掘り起こされた陶片は、石黒の陶器とは似て非なる出土品のように見えるのである。

## 中村裕太 NAKAMURA Yuta

1983年東京生まれ、京都在住。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士（芸術）。京都精華大学芸術学部造形学科特任講師。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。最近の展示に「第20回シドニー・ピエンナーレ」（キャレッジワークス、2016年）、「あいちトリエンナーレ2016」（愛知県美術館、2016年）など。

## 京都精華大学 50周年記念展

### 「石黒宗麿と八瀬陶窯 一五〇年目の窯出しー」

会期：2018年12月14日 [金] - 2019年1月12日 [土]

会場：京都精華大学ギャラリーフロール

主催：京都精華大学

協力：射水市新湊博物館／銀座 黒田陶苑／金田正夫 [無垢里 一級建築士事務所]／木立雅朗 [立命館大学]

黒石いずみ [青山学院大学]／坂部真理 [株式会社環境事業計画研究所]／田畑幸嗣 [早稲田大学]

ナワビ矢麻 [早稲田大学]／余語琢磨 [早稲田大学]

企画：京都精華大学 八瀬陶窯研究会 [米原有二／奥村博美／斎藤光／兼松佳宏／中村裕太]

実行委員会：小野公久／木村盛伸／黒田佳雄／鯉江良二／清水保孝／馬場弘吉／原清／森口邦彦

展示協力：立命館大学・早稲田大学他調査研究チーム

運営担当：千葉紗弥香／川角礼子／井上朔美

会場構成：中村裕太

会場施工：タケダ工作所

ケータリング：nano 食堂

映像：山地憲太 [SHINSEKI]

模型製作：諏佐遙也 [ZOUZUO MODEL]

グラフィックデザイン：下元善光 [EIGHTY ONE]

写真：表恒匡

## 謝辞

本展の開催にあたり、下記の方々からご協力を賜りました。  
ここに記し、深く感謝申し上げます。[敬称略・順不同]

小野公久	射水市新湊博物館	井ノ口畳店
木村盛伸	銀座 黒田陶苑	表恒匡
黒田佳雄	金田正夫	下元善光
鯉江良二	木立雅明	諏佐遙也
清水保孝	黒石いずみ	武田俊彦
馬場弘吉	坂部真理	田中大輝
原清	田畑幸嗣	中島光行
森口邦彦	ナワビ矢麻	マサキナオ
	余語琢磨	山地憲太
諸山正則	立命館大学有志	
	早稲田大学有志	京都精華大学学生有志

編集：米原有二／中村裕太／川角礼子／千葉紗弥香

写真：表恒匡 [pp.6, 7, 8, 42, 43を除く]、中島光行 [pp.6, 7, 8, 42]

写真提供：射水市新湊博物館

デザイン：下元善光 [EIGHTY ONE]

発行日：2019年3月31日

発行：京都精華大学 ギャラリーフロール／八瀬陶窯研究会

Printed in Japan

本書の無断転写、転載、複製を禁じます。